

後志教育講演会 兼 第52回後志管内教職員夏季研修会 講演記録

演題「元氣アップ大作戦」～ココロのサプリメント～

日時：令和元年度8月2日(金)

会場：倶知安町文化福祉センター大ホール

講師 笑華尊塾 代表 塩谷隆治 氏

〈講演内容〉

〇はじめに

笑華尊塾の塩谷隆治と申します。画像を使いながらお話を進めさせていただきたいと思います。皆さん、暑いなか、ありがとうございます。日本一ゆるい講師と言われていています。ぜひ、ゆるい感じでいけたらと思います。元氣アップ大作戦、ココロのサプリメントということで、お話をさせていただきます。長谷川所長が御縁をつないでいただいて、うれしく思います。センターの方も朝早くからの準備ありがとうございます。また、教育現場の方、日々、ありがとうございます。皆様の前で講演できることをうれしく思います。今日は寿大学の方もいらっしゃるということで、とてもうれしく思います。

私自身もいろいろな研修会や講演を聞いているが、「言っていることは分かるのに、なんか入ってこない」と考えることがあります。悪いという訳ではないが、なぜかと考えると、ぶっちゃけ、つまらないからだ。だから、全然、話が頭に入ってこない。私は、これからの学びは、笑いながらでないと前に進まないと思います。眉間にしわをよせるのではなく、笑い合って、笑いながら前に進もうという学びが必要だと思います。ぜひ、笑いながら皆さまの心に何か届いたらと思います。もし、笑えるような場面があれば、笑っていただきながら、前に進みたいと思います。私のことは、塩ちゃんと呼んでください。写真もいつでも撮っていいです。さらなる一体感づくりをしたいと思います。御協力を。皆さまに拍手をしていただいて、私が「よー」と言ったら、「ちゃちゃちゃ、いえい。」とやっていただきたい。(拍手) よーっ、ちゃ、ちゃ、ちゃ(手拍子)、いえい。ありがとうございます。

〇私のプロフィール

私は何者か。私は元々、高校の体育教師で15年、勤務しておりました。体育の中で専門は野球、野球部を担当していました。歳は46歳です。その後、2年間、専門学校に勤めています。全国で初めて立ち上がった、発達障害を含めてコミュニケーションの苦手な学生を受け入れて就職につなぐという専門学校で、2期生の担任でした。私は特別支援の教育については、専門的ではなかったので最初はお断りしていたが、ぜひに、ということで、勉強するときだと思い、お引き受けしました。私のクラスにいた専門学校の学生、高校卒業後の学生ですが、ADHD、アスペルガー、場面緘黙症、社交性不安障害、筋ジストロフィー、いろんなタイプの学生たち、9割の子が障がい者手帳を持っていました。担任ですから、その子たちの就職担当です。障がい者手帳を持った子たちがどうやって社会と結び付いていくかを研究した2年間でした。とってもピュアなんですよ。たった一人、理解してくれる人がいれば全然違うなと思っています。さて、子供が二人、高校1年生の娘と小学校5年生の息子がおります。

ちょっと、最初に勤めた学校の話をしたと思います。もう23年前になりました。23歳の時に教員になったのですが、いきなり校長室に呼ばれて、「待ってたよ、体育の先生。うち、荒れてるから。」と言われました。当時、教育困難校という言い方をしましたが、年間の生徒指導事故が100件を超える学校でした。タバコやお酒ならかわいいなといったもので、新聞沙汰になったものもありました。そんなところに高校体育教師としていくのですから、「なめられちゃあかん」と思って行きました。それが大失敗でした。ある女子学生が職員室に来るなり、壁を蹴飛ばした。注意をすると、「話しかけんな」と言った。「えー」と思いました。別の女子生徒は、ふんぞり返って座って、先生方の書類を勝手に見始めました。注意をすると、「キモいんだ、近づくな」と言いました。なんと、私の教員人生は「話しかけんな」と「きもいんだ、近づくな」からスタートしました。毎日、怒ってばかりだった。男子も悪かった。夜中に男子生徒から電話があつて出ると、「ぶっ殺すぞ」と言われたこともありました。電話線を抜いて寝ていると、夜中にバイクで自宅に乗り付けられることもありました。そんな教員生活スタートでした。当時、3年生女子の体育を担当しましたが、全然、言うことを聞かず、しまいには授業ボイコット。呼びに行って「お前ら来い」というところから、授業が始まります。自信を持って「なめんなよ」と思っていたのに、整列すら、させられないのです。授業不成立です。髪の毛のことを生徒から指摘され、病院に行くと萎縮性脱毛症ですよと言われました。毎日、緊張感の連続で、走り続けていました。もう一人の体育教師、31歳の生徒指導部長が優しく「いいか、塩谷、信頼関係だぞ。信頼関係がなかったら、何をしてもダメだぞ。」と教えてくれました。でも、私は信頼関係がうまく作れず、ずっと悩んでいました。私のにとっては必要な学びだったと思います。どうやったらこの子たちに響くのか、どうやったら人間関係を築けるのか、どうやって話せばいいのか、分からないことだらけでずっと考えていました。いろいろな本を読み、いろいろな研修の場に行きました。

そして、教員2年目、全然大丈夫と聞いていないのに、やる気はあって、担任をやらせてもらった。その学校も若い先生が多かった。荒れていたから、ベテランが断っていたからです。初任者と講師が多かった。だから、平均年齢29歳。私は、最前線でやる担任がやりたいと思ったのです。その年に最大のラッキーは校長が変わったことです。その人は、逃げない人でした。学校改革が始まりました。いろいろな課題がありましたが、まず、暴力と器物破損だと。そして、授業だと。先生方が一つになることです。大人達が本気になること、まとまるのが大切だと思いました。私が卒業生を出すときには、生徒指導事故は4件になりました。先生方、大人が本気になること、ものすごく学校が変わりました。私は学校が蘇るといえるのは、こういうものなんだと体感できました。宝物の経験だったと思います。そして、大人達が個人プレーでなく、チーム動くことの大切さを体感することができました。油断すると、先生方は自分の力を過信して個人プレーに走る人もいますが、チームなんですよ。最幸の教員生活、素敵な15年間だったと思っています。

そして、2011年3月31日付けで退職しました。これからの時代、ココロだと思ったからです。教育現場をもっと、フットワーク軽く切り込む人間も必要だと思ったのです。一番反対したのは、小学校の校長をしていた親父でした。嫁さんが専業主婦で子供が二人いるわけですから。ですが、退職を決意しました。自分は違う角度から教育に切り込みたいと思っていました。まず、東京に飛びました。3か月間、社会起業大学ビジネススクールに通い、そして、朝のモーニングセミナーなど、いろんな勉強会に出かけました。もちろん自己投資、収入ゼロの状態です。自分が何を学んだらよいか考えながら、3か月、東京で修行僧のように勉強しました。そして、「ココロの塾 笑華尊塾」というのを立ち上げる

わけです。簡単に言うと、大人のためのココロの塾。去年、清田に拠点を構え、小中学生向けにも塾をやっています。そして、こう見えて絵本セラピストです。大人に向けて絵本を読んでいます。「イライラしない子育て」や「誰でもできるストレスマネジメント」など、教育委員会などが主催する講演を、年間180～200本しています。それから、企業研修にも呼ばれるようになり、先日も小樽市の新入社員研修を行いました。校長会、教頭会など管理職研修にも呼ばれています。それから、『「童謡」で絶対元気になれる！心揺さぶる童謡セラピーとは』という本も出しています。

○不機嫌は罪

いずれにしても、大人です。大人の元氣アップについてお話します。大人たちが疲れ切っています。すると、子ども達も元気が出ません。子ども達は大人のことをよく見えています。大人がこんなところでイライラするんだと。ココロの時代の到来です。日本人の死因の5つ目にうつ病などの精神疾患が入ってしまいました。自死が1年間で約3万人というデータがあります。1日約90人の方が自ら命を絶っているということになります。WHOの見解では、変死の半数は自死であると言われています。日本の集計には変死は入っていないのですが、もし、日本で、変死も計算に入れると10万人を超えるという説もあります。一体、この日本という素晴らしい国でなにが起こっているのでしょうか。ココロと体をいい状態にするというのがとても大切なテーマですよね、という時代が来ています。世の中は完全にシフトチェンジしています。モノを作れ、売れという時代から、“あなたから”という時代が来ています。

さて、私がこうした研修の場で必ずお伝えしていることが2つあります。そのうちの一つは、これです。ゲーテさんの言葉をお借りして、「人生で最大の罪は不機嫌である」というものです。よく言ってくれたと思います。職場でも学校でも家庭でも地域でも、不機嫌な人がいたら、気を遣いませんか。罪を犯し続ける人がどれだけ多いことか。例えば、オール経営者の研修、参加者が怒っているように見えます。睨みつけている感じがします。そして、終わってから私のところに来て、怒られるのかと思ったら、「塩ちゃん、面白かったよ。」と言うんです。だったら、笑ってくださいと思ったんですけど。でも、60歳以上の男性は笑顔を作るのが苦手なんです。基本、真顔は怖いんですよ。皆さん、顔には気を付けてください。顔はとても大切です。不機嫌そうに見えてもダメなんです。だから、ニコッとしましょう。

○可能性を引き出すのは明るさ

そして、大久保寛司先生、我々講師のなかでは、カリスマ講師と言われていています。この方がいつも講演で話していることですが、子どもたち、チームの可能性を最大限引き出すために必要なたったひとつのこと、明るさであると話しています。そこが暗かったらば、伸びていかない。これが、私がこのような研修でお伝えしている2つのことの2つ目です。「人生最大の罪は不機嫌である」ということと、「チームの可能性を最大限引き出すのは明るさである」ということ。この2つを共有しているチーム、組織は強いと思います。ムスツとしている人が少ないからです。職場だから、チームだから、いろいろなことがあります。良いときもあれば、残念な、落ち込むときもあります。心が折れるときもあります。そんなときにも、必ず明るいムードを作ってくれる人、ムードメーカーがいるはず。明るさが大切だと共有していることが大切です。明るいムードを醸成していく、そして、前を向いて進んでいく。これを共有しているチームは強いのです。さらに言うと、管理職研修で、女性がついていきたいと思う上司

の前で爆発的な力を発揮するという話をするのとドキッとします。社長さんたち、もし、チームの女子がチームの女子が残念な顔で仕事をしているのであれば、考えてもみせんか。

そして、笑いのチカラというお話です。オードリー・ヘップバーンの言葉ですが、「この世で一番すてきなことは、笑うこと、特に、誰かと一緒に笑うことは、魔法の力を持っているのよ」。一人で笑うことも素晴らしいですが、誰かと一緒に笑えたらいいですね。たとえば、日本一の長寿県、寝たきりでなく健康長寿だというのですが、その理由は、1つは病院が少ないこと。もう1つは高齢者もみんな働いていること。そして、3つ目の特徴は、公民館など集う場所が多いことです。何をしているかと言えば、みんなで集まって笑っているのです。どんななことでもいいのです、カラオケ大会でも健康体操でもなんでも、みんなが集まって笑っているのです。それがすごく大事です。

○質問のチカラ

あなたと出会って生徒はしあわせか、ちょっとドキッとします。何をお伝えしたいかということ、質問の力です。私、実は、東京にいるとき質問の認定資格をとりました。コーチングに似たところがあるのですが、優れた経営者達、高いパフォーマンスをする人たちが何をしているのかということ、自分にも仲間にも良質な質問を問いかけているのです。良質の質問です。アドバイスではありません。ついつい、教員はアドバイスをしたくなるのですが、アドバイスではなく質問なのです。その質問をするときに意識して欲しいことがあります。質問には、間違っただけの答えなんてありません。これからは、まさに、そんな時代です。今までは、1つの答えを求めていましたが、今は考え方、捉え方は様々で、みんなで考えていく時代です。だから、間違っただけの答えはなく「すべて正解」だという気持ちが大切です。そして、次に、「受け止める」ということが大切です。出てくる答えは、それぞれ違うので、多種多様な価値観がありますから、自分の価値観と違うものもありますから、受け入れなくてもいいのです。受け止めるだけでいいのです。あなたはそういうふうを考えるんだね、そういう見方もあるんだねということでもいいんです。そして、「出なくても」いいのです。その場で答えが出なくてもいいんです。投げかけられた質問に後で答えが出てくることもあります。それでいいのです。

お近くの方と、この質問について話してください。どんなふうに質問が展開されるかということなのですが。質問はこれです。「学生時代にはまっていたものを教えてください。」2人か3人のグループになっていただいて、お話してください。どうぞ、お願いします。(聴衆、歓談)今日は、質問ってこんな感じかと体感いただければ十分です。今日はここまでにしますが、この後に何がしたかったというと、解決したい課題・悩み・問題点についてです。どうやって質問をするのかということ、YESかNOで答える質問もあるんだけど、本当に思考を深める質問はどうするのかということ、HOWで始めるんです。どのようにしたら、で始めるんです。この課題は何でもオッケーです。HOWで質問するんですよ。自分の中に答えがありますから、自分の中から引き出されたものでないと。人から言われたことは、相当、尊敬している人でないと。自分の中から引き出されたものでないと、パフォーマンスにつながっていきません。実は、皆さん、答えは自分の中にありますから。

例えば、質問家という人が、指導者でも先生でもいいんです。答えを言うのではなく、上手な質問をするんです。そうしたら、ぐいぐい自分で気づいていきます。そして、質問を上手に使える人たちは、問題や課題に直面したときに、自分に質問を投げかけるのです。もしくは、チームでその質問を共有していくんです。例えば、どのようにしたら、ウチのチームの売り上げが上がるのかチームで考えるんで

す。社長から、ああしなさい、こうしなさいと言われないで。みんなで質問しながら、アイデアを出しながら進めていくといいのです。質問については、また、どこかで深めていきたいと思います。今日は、1つだけ HOW という質問を使うとよい、という話をさせていただきました。

○あなたと出会って生徒は幸せですか

あなたと出会って生徒は幸せか、というこの質問。これは、けっこう怖い問いですよ。大好きな教育という仕事をやらせてもらって私は幸せであって、でも、生徒はどうなのかなって。きちんと向き合う人じゃないと、普通でいいんだという人に学ぶ人に学ぶ生徒はかわいそうだと思います。生徒の人生がかわるかもしれないのに、学ぶ意欲の低い教育者でいいのですかと、厳しい言い方だけど、問いかけたいと思います。あなたと出会って生徒は幸せか、これは、ベストセラー作家の喜多川泰さんの言葉です。元々、塾の先生です。ちょっと聞いてください。

数週間前に取り上げられたニュースで、大学生の40%がまったく本を読まないという調査結果が出たというのがありました。ほとんど読まないという人を合わせると、相当の割合になることが予想できます。僕の場合は、大学生が本を読まないというのは、美容師になりたい人が流行の髪型に興味がないとか、野球選手になりたい人がパワプロしかしないというのと同じくらい違和感のあることでした。そもそも、本を読まないで大学生活を送ることが可能な国があるということ自体、驚きですが、それが我が国日本の現状であります。つまり、いまだにと言いますか、いままで以上になるかもしれませんが、大学は安定した職業に就くための肩書づくりにしか利用されていないというのが多くの学生の現状であり、その肩書を手に入れさせることが、自分の一番の役割だと、先生や親をはじめとする多くの大人が思っているということです。本を読まない大学生を生んでいるのは、僕たち教育者なのです。

そんな状況を生んでいるのは、実は、先生が本を読んでいないということです。読書が習慣になっている先生なら、勉強していい成績を取ることも、大学に合格することも、自らの人生を支えてくれるのは読書の習慣だと知っているはずですよ。それを知っている人が、子ども達にそのことを伝えないはずがありません。つまり、本当の意味での読書の楽しさ、素晴らしさを知る人であれば、何をさせておき、自分の担当でなくなる前に、子ども達を読書好きにはしたいと心から思うはずですよ。子どもたちの人生は、合格する前の人生よりも、合格した後の人生の方が長いから。僕がいつも自分に言い聞かせている言葉です。嫌いでもとにかく勉強させれば合格するまでの人生は何かかなるかもしれない、でも、それは本当に合格した後の長い人生でも良いことだと言い切れるだろうか。

僕は、子ども達が好きで始めたことを嫌いさせない。もっと大好きにしたい。子ども達が嫌いで始めたことでも好きにさせることが、先生の一つの使命だと思っています。小学生はみんな勉強が大好きで入ってきます。それをもっと好きにして卒業させてあげる。勉強が嫌いで入ってきた中学生を勉強好きにして卒業させてあげる。それができる先生と出会って初めて子ども達は合格した後の人生を、つまり、僕たちのもとから巣立っていった後も幸せになれるのです。すべての生徒から、あの人と出会えたらから、今の幸せがあると言われる人になるべく努力するのは、先生の義務です。そして、本気でそれを願うなら、自分と出会って幸せになれたと先生自らが確信できるような何かを手にしたと願うなら、読書の楽しさを伝える以上に、強い確信を得る方法はありません。一冊の本と出合うだけで人生が変わるのに、読書という習慣を持っていないばかりに何十年と悩み続ける人生を送る人が世の中には何百万人もいます。彼らはだれからも読書の楽しさを教えてもらえないまま大人になったのだということ、僕

はいつも忘れないようにしています。大好きな本について、大好きなんだということが伝わるように、熱く子ども達に話をしましょう。そして、一緒に本が大好きな国をつくりたいですね。少なくとも大学生がみんな読書が大好きな国にはしたいなあ。

WPCという発言集にあるものです。本を読むことの楽しさを伝えることができるなら、前に進みやすいんじゃないかと思います。我々大人が本を読んでいますかということも投げかけていると思います。

○人間が変わる方法3つ

さあ、自分に問い続ける、ということをやっていきたいと思います。人間変わるには、方法は3つしかない。1 付き合う人を変える 2 時間配分を変える 3 住む場所を変える 決意を新たにすることは、案外、効果がない。それよりも、付き合う人を変えてごらんということです。学校と家との往復しかないというのでは、あまりにも視野が狭いことに気が付きました。こんな狭い価値観のなかで生徒たちを見ていたら、この中でしか子ども達は育ちません。私たちの価値観を広げていく、私たちの学びを広げていくことは、子ども達の学びを広げることと同じことだと思っています。次に、時間配分を変えることです。1日24時間しかありません、どうやって使うかということです。それから、住む場所を変えると自分は変わりやすいのです。

小中学生は、家と学校の往復だけです。気付いている先生や親は、いろいろな人に合わせることをしているのです。親だけの考えでなくて、学校だけの価値観でなくて、もっといろんな人にあったら面白いことを知っているのです。私たち大人も、いくらでも自分を変えることができます。残念だった発言があります。高校教師だったころ、研修会で、けっこう年配の先生が、「今更勉強してもな」と言ったのです。何を言ってるの、これからでしょと思い、ちょっと腹が立ちました。

○フィジカルケア（体を整える）

さあ、ココロとカラダの話です。私の前に、ココロの折れてしまった方や悩んでいるの方が来てくれます。ただ、ココロとカラダはリンクしています。カラダの状態を整えると、ココロの状態が良くなることがあります。そして、私が今おすすめしているのは、腰骨を立てることです。高校教師のときに、立腰タイムという、腰を立てて、静かに呼吸を整える時間を作りました。森信三先生が提唱した、立腰教育というものです。背もたれを使わずに座ります。肩の力を抜きます。ちょっとやってみてください。腹筋と背筋を使うから、結構、しんどいと思います。腰骨を立てると、人生がシャンとするのです。そして、呼吸法をミックスしたらいいと思います、やっています。丹田呼吸法です。15秒はききる、3秒すう、2秒止める。これを自分のリズムでやってみてください。1日1回でも腰骨を立てると良い、気が付いたときにできるといいと思います。私は、ご飯を食べるときに、腰骨立てて、いただきますというのを、子ども達としています。

森信三先生は、しつけの3原則を提唱しています。あいさつ、へんじ、履物を揃える。ココロのコップは、思春期は横を向いているが、しつけの3原則をしっかりとしていると、ココロのコップは戻ってくるのです。生き方の種まきをしてないと戻ってきません。子どもにやらせるのではなく、大人自身が実践しましょう、ということです。子ども達は、親の言うことは聞かないが、やっていることはマネします。子は親のココロを実演する名優である、親たちができる実践から、やってみませんか。しっかり種まきをしましょう。しつけの三原則だけ、びしっと、やってみましょう。

〇ココロを整える

時代が変わります。人口減少、仲間とかファンの時代、A I (人工知能)の時代です。日本は取り残され感、満載です。例えば、世界の企業ランキング、平成元年には32社がランクインしていましたが、去年、平成30年には1社だけです。トヨタ自動車は健闘しているのですが、世界の流れから取り残されているんです。今までの教育のやり方だけでは、この時代の変化には対応しきれないと思います。じゃあ、できることは何なのか、これからは、自分で問題を発見して、仲間と協力し合って解決できる力がとても求められています。今、教育現場でいろいろな取り組みがされている。

いずれにしても、私たち大人が元氣アップしないといけません。そこで、元氣アップのヒントです。まず、ハイタッチです。私、実は、日本ハイタッチ普及協会の会長です。私がつくりました。北海道マラソンで、沿道サポーターとして、ハイタッチボランティアを7年しています。今日は、皆さんに日本ハイタッチ普及協会の公認の技を教えます。ハイタッチ、グット。みなさんもお近くの方とやってください。

〇心理学・脳科学のいいとこどり

私は、心理学・脳科学のいいとこどりでいいと思います。例えば、心理学にABC理論というのがあります。ざっくり心理学です。これは、あなたがラクチンになる考え方、捉え方をしてみませんか、ということです。ABC理論を簡単に説明するならば、こんなことです。A ことがら、B 考え方（とらえ方）、C 結果のことです。同じ事柄でも、違う考え方、あなたがラクチンになる考え方をしようということです。なかなか、それができないのです。だから、トレーニングをしていきましょうということなんです。

脳科学の方が、歴史が浅いんです。脳って、ブラックボックスと言われるくらい分からないことだらけなんですけど、分かっていることもあるんです。人間の脳は、黙っているとマイナスに引っ張られるですって。だから、皆さんの周りに不平不満や愚痴、文句、心配事ばかり言う人がいたら、それは普通の人です。だって、黙ってたらマイナスに引っ張られるんだもの。だから、プラス思考やポジティブシンキングで、初めてバランスがとれるんです。

また、不安や心配で眠れない人もいます。脳科学で分かっていることの一つに、脳は現実とイメージを区別できないという性質があることがあります。まだ起こってもいないのに、いつも心配している人はいませんか。それは、マイナスのイメージトレーニングみたいなものです。たとえば、母親が自分の子供に、そそっかしいんだから交通事故に気をつけなさいよと言いつつ続けていると、子供は自分がそそっかしいと思い込んで本当に事故を起こしてしまっ…ということも。まだ起こってもいないことを心配するのは、失敗のイメージトレーニングのようなものです。じゃあ、何をしたらよいのか。まだ起こっていないことへの不安、まだ、起こっていないのだからそれは心配しなくてもいいんです。愛のパワーを増やしていきませんか、ということです。突き詰めれば、ぜんぶ愛か恐れかです。今は教育現場でも、そんなことやったら困るぞ、ではない。愛を増やせばいいんです。どうやったら強みを生かしながらかと、多くの人に喜びを伝えていけるのかという発想なんです。こんなんじゃ、大変なことになるぞというおどしの教育ではなく、愛の部分をいかに強くできるか、ということだだと思います。

○コトバのリフレーミング

今日は皆さんに疲れにくい体をゲットする方法を教えたいと思います。皆さんの脳にいちばんダメージを与える言葉は、「疲れた」です。大人たちは言いまくっています。この言葉を聞いたとき、まだ、高校で野球部をもっていましたから、「疲れた」をNGワードにしました。野球部だからへとへとになるんですが、言葉を言い換えてリフレーミング、「疲れた」を「充実している」と言い換えさせました。言葉を変えるだけで、全然、伸び率が違うんです。「疲れた、疲れた」と言っているチームと、「充実している」と言ってニコッと笑えるチームで。伸びている企業の経営者が何をしているかというところ、うちの従業員がどんな言葉を発しているかまで、気にしています。コトバの力はすごいんです。

○アフメーション

さあ、アフメーション、肯定的な断言をすることですが、なかなかできない。今日は、これを皆さん一緒に言ってほしい。心から思っなくても、言葉にできればいいんです。私の後に続いて、元気よく言ってみてください。「ワクワク ツイてる 絶好調\(^o^)/」「大変？やったあ！大きく変わる！」「ピンチ ピンチ チャンス チャンス ラン♪ラン♪ラン♪」「ゆるします。ゆるします。ゆるします。あの人を許せない自分を許します、髪の毛が後退しているのではない、私が前進しているのだ。」私に出会った生徒たちは、しあわせになります、できる！できる！できる！私はできる。」「私はしあわせを連鎖させるチカラを持っています。」

○さいごに

最後に、吉田松陰の話をしてください。吉田松陰が、塾生たちに命をどうやって使うのかと話していた。松下村塾では、10人の若者たちが学んでいました。そのなかには、しんちゃん（高杉晋作）、げんちゃん（久坂玄瑞）、かつらっち（桂小五郎）、ひろちゃん（伊藤博文）、皆、松下村塾です。幕末期に日本を良くしようとヨーロッパに行っています。奇跡の学校と言われています。松陰先生は、下級武士達もいた塾です。そんな塾生たちに、知性だぞ、目の前のことを全力でやれと話していました。黒船が来航した時、日本は鎖国をしていたので震え上がりました。その時、吉田松陰先生は、乗り込んだんです。坂本竜馬は欲しいと言った。薩摩藩・佐賀藩・宇和島藩、3つもの藩が数年で黒船をつくっちゃいます。こんな先人たちがいたから、今の日本があります。歴史を勉強することは面白いです。当時の人たちの生きざまを感じると、もっと自分もできることがあるんじゃないと思えます。

今日は、出会いに感謝です。一生懸命、聞いていただきありがとうございました。以上で、お話終わります。ありがとうございました。